

チェルノブイリ通信

2006年7月7日

No. 67

発行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局

連絡先 福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16(株)ウインドファーム内
TEL・FAX 093-203-5282

E-mail jimmu@cher9.to

URL <http://www.cher9.to/>

郵便振込口座 01770-1-65328 チェルノブイリ支援運動・九州



チェルノブイリ20周年ベラルーシ国際会議の会場

*カンパのお願い
検診プロジェクトの進歩に向けて

*ベラルーシ国際会議報告
被災地から求められる継続支援

*つれづれベラルーシ道中記
初めて訪れたチェルノブイリの大地から

*ベラルーシの人々からの声
甲状腺ガン検診を受けた人々へのインタビュー

*チェルノブイリ基礎知識

*国際会議参加報告
ベラルーシの人、土、風とともに

*チェルノブイリ支援運動・九州事務局日誌
ベラルーシ駐日大使の訪問

*福祉工房「のぞみ21」 ナターシャさん家族の今

ベラルーシでの甲状腺がん検診

10年目を迎えて、第三のステージへ

移動検診プロジェクトの資金 (あと40万円) が
不足しています。カンパをよろしくお願いします。

いきなり冒頭からカンパのお願いでごめんなさい。本当なら、多くの成果があったベラルーシでの国際会議の報告からスタートさせたかったのですが、秋の検診プロジェクトを実施するための資金が不足している事情から、せっぱ詰まった見出しで始まってしまいました。

チェルノブイリ原発事故から20年が過ぎ、人々の関心も薄れていくなか、チェルノブイリへのカンパの金額も減少傾向にあります。その一方で、チェルノブイリ支援運動・九州によるベラルーシでの検診は現地でも非常に高い評価を受け、そのシステムが少しずつ広がろうとしています。これから100年間、チェルノブイリと甲状腺をめぐる問題は続きます。現地で必要とされるこの検診活動を継続していけるよう皆様のご協力をどうぞよろしくお願い致します。(チェルノブイリ支援運動・九州 代表 矢野宏和)



検診を受けているのは18歳の女の子。チェルノブイリ原発事故から20年が過ぎ、今ベラルーシではこの年齢層の人々に甲状腺がんが多発している。検診を行っているのはエレナ医師。すでに自分たちの手で検診が行われるようになってきている。

このところ、チェルノブイリ支援運動・九州の事務所を訪れる度に、事務局スタッフに「どんな？」と問いかける。秋の検診に向けてたてた資金準備の進行状況がどうなっているのか？それが気になる毎日なのだ。

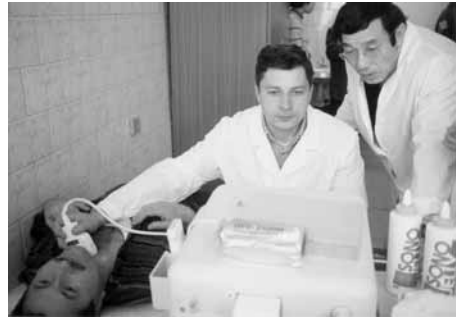
昨年11月の検診準備で、資金調達で四苦八苦したことを反省し、今年は事前に準備を進めていこうということになった。8月までに200万円の資金を自力で調達して余裕をもって検診に臨む。そんな計画を立てたが、現実には厳しい。

事務局を中心に、情報発信やイベント参加を通して資金集めに取り組んでいるが、8月末までにあと40万円を集めないとならない。今、この原稿を書いているのが、6月26日。これから、残りの40万円の準備に向けて、炎のラストスパートを誓っているところである。

正直なところ、いつもカンパを寄せて下さる会員の皆様に、この上さらにカンパのお願いをするというのは、非常に気が引ける。チェルノブイリ通信の巻頭でいきなり、カンパのお願いをするのも初めてのことだ。本来、現地の状況を伝えることが、この通信の本分だと思っているのだが・・・編集長としても非常に苦しい状況である。

こうした悩みとは裏腹に、チェルノブイリ支援運動・九州による甲状腺がんの検診活動は、ベラルーシではとても高い評価を得ており、今まさに、第三のステージに達しようとしている。

1997年から始まったプレスト州ストーリーン地区で検診を実施した最初の5年間で第一期。その後、プレストの州都であるプレスト市に拠点を移し



甲状腺の検診を行うアルツール医師と武市医師

て第2期がスタート。この段階ですでにアルツール医師らは技術的にも自立し、自分たちの手で検診を行えるようになっていた。同時にストーリーン地区も含めブレスト州全体の検診やデータを管理できるようにになり、ストーリーン地区で、「点」として始まった検診が、ブレスト市に拠点を移すことにより「線」となった時期と言える。

触診からエコー、そして吸引穿刺による細胞診までに至る検診行程も今では「とても効率の良いシステム」として定着し、ベラルーシでも高い評価を得るようになった。

そして、迎えた第3のステージ。それはその検診システムをベラルーシ各地に普及させる段階である。点から線、そして面へ。これは検診プロジェクトをスタートさせた時に描いたビジョンに他な

らない。

今年、秋に予定されている検診は、この第3段階に至る最初として位置づけられる。新たな拠点となるのは、ミンスク郊外にある「ラゴイスク」。汚染されていないミンスクの郊外に新たな拠点を置く理由は、そこが汚染地からの移住者が多く住む場所だからである。

汚染地に住んでいた頃の被曝が原因となつて甲状腺を患う人は多いが、甲状腺がんの早期発見に必要な検診システムはない。この場所で、現在、ブレストで行われているチェルノブイリ支援運動・九州の検診システムを実施できないだろうか。現地のそんな要望から導かれた、ストーリーン、ブレストに続く第3の場所となる予定だ。

これは検診システムに限ったことではないのだが、物事が広まってくるとき、実践例としてモデルケースがある場合、それが広まっていく速さは格段に違う。「こんなやり方もあるんだよ」と、実例を提示できる強さが、現地の人を納得させ、自らもやってみようという気持ちにさせる。

「甲状腺がんを早期に発見させるシステムを導入したい。」そうした自発的な決意は、決してお金で生まれるものではない。いわんや、押しつけの支援からはほど遠い。

もし、資金の準備が整い、秋の検診が

実施されたなら、この第3の拠点となるラゴイスクには、エコー（超音波診断装置）を送る予定にしている。そして、日本の医師たちとともにブレストからアルツール医師らを派遣し、甲状腺の検診を行いながら同時進行でその検診技術を普及させていくことになる。アルツール医師にはその後も継続して指導に当たってもらうことになるだろう。もちろんブレストにおいても今まで通り日本の医師や臨床検査技師を派遣し、アルツール医師らのさらなる飛躍を果たすための検診は実施されていく予定だ。またアルツール医師たちの検診チームが各地で検診を行う際に必要な医療器具（プレパラートなどの消耗品）の提供は必要不可欠となるだろう。

このようにしてブレストでの検診を充実させながら、第3の拠点、ラゴイスクでも検診技術を普及させ、アルツール医師たちと同じレベルの検診が実施されるようになった時、点から線、そして面へ至る行程を、私たちは踏破したことになる。

そして、面はその後、さらに広がっていくだろう。その広がりゆくイメージは、確信となつて私たちの手の中にある。それ故に、秋に予定されている検診は重要な意味を持っているのである。資金

調達という、今チェルノブイリ支援運動

・九州が直面している課題。だから、これは何としても乗り越えたい。私は思う。もし、お金というものが正しく使われるような時代になったとき、この検診活動の広がりには、ベラルーシだけには収まらず、さらに広がっていくのではないかと。

限られたお金と、そして市民と専門家の思いが重なつて実施されてきたこの取り組みは、市民と専門家の共同作業のモデルケースとして、世界各地に点在するまともな医療が施されない場所でも応用されていく。それだけの意味をこの検診活動は持っている。私は思うのだ。

実際に、運営委員の寺嶋悠さんがチェルノブイリ原発事故の20周年に際して行われたベラルーシ国際会議にて、チェルノブイリ支援運動・九州の検診プロジェクトの取り組みを報告したところ、ウクライナの南西部に隣接するモルドバ共和国の人から「私たちの国にも被曝者がいて、私たちはその支援に取り組みたい。ぜひモルドバでも検診を実施してほしい」と、言われたという。（詳細については、4ページから始まる寺嶋さんのベラルーシ国際会議報告を参照）

つながりゆく人の想いに限りはないというのを、この検診活動を継続するなかで、示していきたいと願っている。

被災地から求められる継続支援

報告 寺嶋 悠／運営委員

今年4月19日から21日、ベラルーシにおいて国際会議「チェルノブイリ事故から20年～被災地の復興と持続可能な発展のための戦略～」が開かれた。会議には、国際機関、政府関係者、NGO、研究者・専門家など世界各国から1800名が参加し、事故犠牲者の哀悼とともに、現在までの調査結果や被災者支援プログラムについて報告を行った。チェルノブイリ支援運動・九州からも、国際会議に合わせ短期間の訪問団を派遣。国際会議の専門家分科会、NGO円卓会議の場でこれまでの報告を行ったほか、顕微鏡レンズや縫合糸、医療機材などの支援物資を届け、関係者と秋の検診団派遣について打ち合わせ等を行った。



現地で取材を受ける寺嶋さん

寺嶋 悠 (てらしま ゆう)

1978年生まれ。西南学院大学卒業。チェルノブイリの他にも川辺川のダム問題や国際債務の問題などいくつものNGOと関わりながら活動を展開。日頃から小学校や中学校でチェルノブイリの現状を子どもたちに伝えている。今回のベラルーシ国際会議では、チェルノブイリ支援運動・九州の検診プロジェクトなどについて英語で発表した。

■会議参加へ

長い冬が終わり、おだやかな春を迎えた初春のベラルーシ。滞在先のホテル近くには静かに水をたたえた川が流れ、春霞が白く包んだ大きな空を見上げると、20年前にこの空を放射能が飛んでいたとは実感がたく思える。今年4月26日、チェルノブイリ原発事故から世界は20年目を迎えた。

26日に先立ちベラルーシで開かれた国際会議は、国連やスイス、ユニセフ、日本やフランスの在ベラルーシ大使館等の支援を受け、ベラルーシ政府が主催したもの。支援運動からは、武市宣雄医師(広島甲狀腺クリニック)、星正治教授(広島大原爆放射線線医学研究所)、現地医療コーディネーターの山田英雄さん、運営委員の山口(ロシア語通訳兼)、寺嶋、それに同行取材として大分合同新聞中津支局の和田礼子さん、読売新聞本社科学部の木下聡さんが参加した。

今回訪問の目的は、支援物資を届けたり関係者との打ち合わせという通常の目的に加えて、他団体や国際機関のチェルノブイリ支援の実態を知ること、会議の中で報告を行うことだった。会議の情報は1年ほど前から知っていたが、支援運動にとっても参加は

初めてのことで。緊張と期待と不安の入りに交じった気持ちで、当日を迎えた。

■会場を埋め尽くす参加者

会議初日会場となったのは、ミンスク旧市街の中心部にある共和国宮殿。客席はベラルーシや海外からの参加者で埋め尽くされ、日本からの参加者も数名見かけた。初日は大ホールで全体会議が行われ、政府関係者の挨拶に続き、各国の国際協力機関などが、事故後の取り組みをそれぞれ報告した。プレスト州での私たちの検診では、

外国の国際機関と出会うことはほとんどない。今回の会議では、国際機関や他のNGOが現地でのどのようなプロジェクトを行っているかの情報を集める、重要な機会でもあった。各機関の報告によって、さまざまな国際機関がそれなりに被災者支援を行っていることを知ったが、IAEAなどは、事故後の原発安全管理システムの構築を実績として挙げ、他の報告でも声高に被災からの復興を強調したのもあった。全体として被災者数や事故後の汚染地についての認識なども、これまでに見聞きしていたもの以上の目新しい報告は少なかった。



円卓会議の様子

■国際赤十字も支援運動・九州の 取り組みを評価

その中で、国際赤十字連盟事務局長のマルク・ニスカラ氏の報告は、支援運動・九州にとって感慨深いものがあった。この報告のなかでマルク・ニスカラ氏は甲状腺ガン検診の代表的モデルケースとして、アルツール医師らによるプレスト州移動検診チームの甲状腺ガン検診を例に挙げ、これまで1000人のガン疑い患者を見つけ、そのうち実際に50名の命を救うことができた」と報告した。

チュエルノブイリ支援運動・九州では1997年から甲状腺ガン検診に取り組んでおり、現場ではアルツール医師を中心とするこのプレスト州移動検診チームと

共同体制を組んでいる。この取り組みでは、プレスト州で年間1万5000人を検診し、その中で詳しい診断が必要な患者に対して、チュエルノブイリ支援運動・九州の医師団が現地医師と並んで詳細な検診と診断を行う。私たちはこの9年間のプレストでの取り組みが実際に評価されていることを改めて知った。この喜びは、日本の会員の皆様をはじめ、この取り組みに関わったすべての方々に分ち合いたい。

■NGO円卓会議で取り組みを報告

会議2日目の会場は、ミンスクから200キロほど離れた汚染地であるゴメリ市。午前中に全体会議、午後からはテーマごとに分かれた専門家・研究者会議と、NGO円卓会議が開かれた。

プレストでの甲状腺ガン検診のプロジェクトリーダーである武市医師は、専門家会議の中で、現地医師と共同で実施している甲状腺ガン検診の結果と、事故による被曝との関連について、ヒロシマとの比較を交えながら報告。また、放射線量についての専門家である星先生は、ベラルーシの3分の2を覆うと言われる低濃度から高濃度の放射線量について、これまでの調査結果を報告された。

私たち支援運動スタッフは、NGO円卓会議に出席。「円卓」の名の通り、中央

の大きな丸テーブルを囲んで椅子が並べられた会場は、50名ほどの参加者でほぼ満席だった。NGO会議とは言っても、国際機関や政府系外郭団体のようなNGOの報告も多い印象だったが、中にはドイツのオットー・フグ大学やマインツのNGO、イタリアやスウェーデンなどの団体も報告を行った。日本から参加したNGOは私たちのみだった。

支援運動は円卓会議の中で、日本のチュエルノブイリ支援NGOの動きや、現在私たちが行っているプレスト州での検診活動について報告した。

支援運動・九州の甲状腺ガン検診プロジェクトの特色は、なによりも、市民とNGO、専門家とが連携し、被災者支援に取り組んでいること。被ばく経験を持つヒロシマや日本医科大学の専門家による全面的なバックアップを受け、首都の病院と汚染州の検診現場とを結ぶ連携システムづくりや、医師の人材育成などをカバーしながら、甲状腺ガンの早期発見と治療を目的として取り組んでいることについて、活動の様子をスライドで示しながら報告すると、会場から大きな拍手を受けた。

■他団体との交流、意見交換も

会議終了後あわただしく会場移動をす

数名の参加者から受けた。「プレスト州に住んでいるが、今話にあった甲状腺ガン検診を私も受けたいのだが・・・」

円卓会議終了後、私たちのところへ、プレスト州のリクビダートル（汚染処理作業労働者）連盟メンバーだという男性が近づいてきた。「私の友人や親類は次々と死んだ。私も喉の調子が悪い」と話す彼に、プレスト州立内分泌診療所のコンタクト先を書いて渡すとても喜んでいた。リクビダートル連盟ならば私たちの検診の情報は行っているだろうと思っただけ、そうとは限らないようであった。

ほかにも、ベルギーのNGOから、私たちが報告の中で提示した甲状腺ガンに関するデータの詳細について質問を受けた。「事故後の状況についてさまざまな意見があるが、その裏付けとなるデータを採るのに苦労している」と言う。支援運動が信頼できるデータを手に入れることができていないのは、ひとえに現地と日本の専門家との連携あつてのことで、一般のNGOにはデータ入手に苦労もあるのだろう。この団体は主に転地保養プログラムを行っているそうだが、医療物資支援もしているらしく、「医療機器をベラルーシに届ける際に苦労している。皆さんたちはどういうふうに取り組みしているのか参考までに教えてほしい」

い」と尋ねられ、同じ支援に取り組み
NGO 同士ならではの情報交換もあった。

モルドバの NGO の女性は「以前から
ホームページを読んでいて、連絡を取り
たいと思っていた」と私たちに挨拶に来
られた。モルドバは、ウクライナの南西
部に隣接する国。「私たちの国にも被曝
者がいて、私たちはその支援に取り組ん
でいる。ぜひモルドバでも検診を実施し
てほしい」と、団体リーフレットを受け
取った。すぐには難しいだろうが、汚染
地の情報として気になり、できる範囲で
の情報交換や連携を進めたい。

その他、いくつかの国際機関と短く意
見交換を行った。

■会議を終えて

2 日目の夜には、会議参加者向けにゴ
メリの文化イベントが行われた。ステー
ジでは、赤や青の刺繍の入った民族衣装



会議で活動報告を行う寺嶋さん

をまとった子どもたちによる歌や踊りが
披露され、汚染地としてではない、ゴメ
リの伝統文化を垣間見ることができた。

その後国際会議会場は再び首都ミンス
クへ戻り、翌 4 月 21 日に最終日の会議が
開かれたが、私たちは日程的にどうして
も 3 日目会議には参加できず、21 日早
朝、ミンスク第二空港を後にし帰国の途
についた。

■NGO や国際的支援の実状

NGO 円卓会議で報告を行った団体
は、10 団体ほどだった。そのうち、国際
機関や政府系外郭団体を除く草の根
NGO となると、わずか数団体に過ぎな
い。実際にチェルノブイリ支援をしてい
る NGO は、今回参加していた団体以外
にもあるのではないかと思う。私たち以
外で、日本から今回の会議に参加したの
は、チェルノブイリ子ども基金、カタロ
グハウスのチェルノブイリ母子支援募金

・通販生活、笹川財団、広島や長崎の専
門家などだった。日本の NGO だけでも
他にもあり、規模の大小はあるだろうが、
ベラルーシではなくウクライナ側を支援
している NGO や、欧米の NGO まで含
めるともっと多くあるだろうと感じた。

また、国際機関の実施している取り組
みを知ることができたのも、収穫の一つ
だった。

国際赤十字連盟は、「チェルノブイリ
人道的支援復興プログラム」と名づけら
れた移動検診プロジェクトをベラルーシ
・ウクライナ・ロシアの計 6 州で実施し
ている。「国連開発計画」のウクライナ支
部は、「チェルノブイリ復興・開発プログ
ラム」として、ウクライナでコミュニ
ティの自助努力推進や生計の確立、地域
政策への助言などを行っている。

ベラルーシ政府は、国際機関と協力し
ながら、汚染地で「復興のための協力プ
ログラム」を実施しており、カトリック
教会も子どもの転地保養に取り組んでい
ると言う。また、スイス外務省の外郭団
体である国際協力機関 SDC は、母子健
康や学校教育、地域の支援プロジェクト
を行っているほか、「チェルノブイリ・イ
ンフォ」というプロジェクトを通して、
ホームページなどでチェルノブイリ支援
に取り組む団体の、国際的な情報交換の
機会を設けている。

ただ、会議での国際機関や NGO のそ
れぞれの報告を聞いた感じでは、転地保
養プログラムに取り組む団体が多く、意
外にも医療支援や医師育成といった形で
のチェルノブイリ支援は少ないという印
象を受けた。国際機関でも、医療支援を
している組織もあるが、そうでない形の
地域支援を行っている組織も多くある。
ヨーロッパの NGO に、子どもを対象と

した転地保養、サナトリウムの支援が多
かったのは、日本と比べれば、食生活が
現地とあまり変わらず、地続きなので移
動費も抑えられるからという理由もある
だろう。加えて、医療施設や医師の育成
は、NGO が単独で取り組むにはなかな
かハードルが高いということも理由の一
つかかもしれない。支援側と受入側の協力
体制、継続性、中身、医学専門知識や言
葉、現地での綿密な情報収集などが必要
で、それらを考えると、支援運動はある
意味で恵まれた NGO とも言える。医療
支援に取り組むための人的資源を、偶然
と必然の両方の意味で、そろえることが
できたからである。

■支援のあり方について 手応えと確信

「国連開発計画」とユニセフは、200
2 年の報告書の中で、「医療施設には国
際的な人道支援団体、慈善団体から寄付
された高い性能を持つ医療設備を備えて
いたものもあったが、中には、理想的と
は言えない、不適切な方法で医療機器が
使用されているケースも見られた。例え
ばある病院では、無菌状態を作ることの
必要性が考慮されないまま、骨髄移植手
術が実施されていた。いくつかの診療所
や病院では、必要な周辺機材がなかつた
り、適切な技術を持つスタッフがいない

ために、寄贈された医療設備が使用されないままだった。これらの例は、主要な医療設備を一度限り提供することによって起こる問題である。つまり、医師育成支援やメンテナンス、消耗品の継続的な支援がないために、かなり多くの医療設備の機能が無駄に終わっている」と指摘している。

私たちの願いは、正にこのような状況を解決することである。

支援運動のような被災者支援のあり方は、効果が目に見えてすぐに出るというものではない。しかし、腰を据えて、中長期的視野に立つ支援を続けて行けば、全体的に被災地医療の底上げにつながり、結果的に多くの人の命を救うことになる。どこにも先例がない中、支援運動ではそう信じ、これまでのチェルノブイリ支援を続けてきた。今回の会議では、国際的なチェルノブイリ支援の枠組みの中でも、その方向性が間違っていないことを実感し、これまでの取り組みに確かな手応えと確信を持つ機会にもなった。

■チェルノブイリ20年を超えて

チェルノブイリによる将来的な死者数の推計について、国際社会では多くの議論がある。推計人数も一定しておらず、9000人(WHO報告書)、9万3000人(グリーンピース)、3万〜6万人(緑の党など欧州の市民団体)などばらつきがある。事故後急増した小児甲状腺ガンは、事故後に増えた病気の中で唯一、チェルノブイリとの因果関係が認められている病気である。しかし実際には、白血病、血液循環の病気、白内障、糖尿病などその他の病気と

事故と関わりを指摘する根強い声もあり、慢性的な不安がもたらす精神的な影響、低濃度汚染地に暮らし続けざるをえない多くの住民の健康状態、リクビダートルとその子どもの健康についても懸念されている。

チェルノブイリは、ベラルーシ、ウクライナ、ロシアの3ヶ国で700万人の人々に影響を与えた。あの悪夢のような事故から20年が過ぎたが、事故による影響は20年を過ぎてようやく分かってきたというレベルである。今後何が起こるかは確実には分からないが、「チェルノブイリはもう終わった」などは決して言えないのは、会議参加者の誰もが認めている。世界中の人びとの関心が急速に失われる中、会議でベラルーシ政府が強調したのは「継続的な支援の必要性」だった。

ベラルーシで広島、長崎を知らない人は、おそらく誰もいないだろう。支援運動がチェルノブイリ支援をする時、現地の被災者は、私たちの後ろにヒロシマ・ナガサキと、高い医療技術、それにこの活動を支えている日本の市民、一人ひとりの思いを見る。これまでに積み上げてきた経験を、今後へどうつなげていけるか。会員の皆さんとともに、これからも共に被災地の人びとを支え続けていきたい。

*国際会議に関する詳しい情報
「チェルノブイリ事故から20年」
「被災地の復興と持続可能な発展のための戦略」
<http://www.chernobyl.gov.by/en/>
「チェルノブイリ・インフォ」(SDC「チェルノブイリ災禍の長期的影響における国際交流プラットフォーム」)
<http://www.chernobyl.info>

文化祭でチェルノブイリを紹介した 高校生からのお手紙

「今、何をすべきか」



チェルノブイリ支援運動・九州の皆さんへ

この度はパネルの貸し出しをして頂き、ありがとうございました。パネルは文化祭展示の「チェルノブイリ原発事故20年」の中で活用させて頂きました。私たちの作成した資料だけでなく、視覚的な情報を展示することにより、多くの方々に理解して頂けたのではないかと思います。

現地の写真はなかなか観る機会がなく、その写真に映し出された様子に「過去のことではないのだ」と感じたようです。私たちも文化祭までの期間、客観的な情報が触れていなかったせいか、現実味がなくなっていました。パネルを見ることによって「今、何をすべきか」に気づきました。

この展示を通して、多くの方々が募金して下さい、私たちが語らずとも、感想を一言、二言残していかれました。そして、「今、何をすべきか」に気づくことができ、実行できた喜びと、世界の中の一人である喜びを感じ、笑顔で帰っていかれました。

私たちはこれから「今」がとても大事であることを感じ、これからも国際協力を考えていきたいと思いました。私たちは、今後もこの文化祭で得たものを伝えていきたいと思っています。

山口県立下関南高等学校 国際協力の会

つれづれペラルーシ道中記

初めて訪れたチェルノブイリの大地から

和田 礼子（大分合同新聞記者）



初めてペラルーシを訪れた和田さん

チェルノブイリ支援運動・九州のペラルーシ訪問に同行させてもらった。「仕事で」ではなく、ただ「ペラルーシを感じてみたい」との思いから。原発事故から20年の今、その地に立ち、人々の暮らしに直接触れてみたかったのだ。きっかけは、2月にチェルノブイリ支援運動・九州（以下、チェル九州）の報告会を見たペラルーシの写真。シラカバの森林、豊かな水をたたえる湖。それまで考えていなかった美しい風景だった。「森の人」と呼ばれる住人は温厚で優しいという。私たちと同じように日々を暮らしているんだという実感が、なんだか無性にわいた。

もちろん、チェルノブイリの深刻なつめ跡のことは、これまでチェル九州の報告会などで知っていた。でも、頭ではわかっていてもどこか遠い大地だった。運営委員の山口英文さん「ペラルーシに行ってみませんか」と誘われたとき、（その言葉を想像もしていなかったので）最初はやりわりとおことわりしたほど。ところが、風景写真が私の思いを一気にペラルーシへ運んだ。あの国で人々はどうか暮らし、何を考えているんだろう。日に日に気になり、気がつけば訪問を決めていた。

4月。ペラルーシの大地にいた。モスクワから約1時間半（いまだに国内線なのはなぜ？）首都とは思えないほど静かな空港。周辺は本当に牧歌的で心なしか空気もおいしく感じる。ミンスク中心部に向かう道中は、かなたまで続く平原と白いシラカバの森。あの「写真」の風景がそのままあった。

今回のチェル九州訪問団の目的は、事故20年の国際会議への出席、医療機関への医薬品届けと現状把握、次回の検診の調整などだ。現地の福祉工房「のぞみ21」やNPO団体「コンフィデンス」との面談もある。メンバーは運営委員の山口さん、寺嶋さん。広島の武市宣雄医師、星正治広島大教授が一緒だ。

ペラルーシの滞在4日のうち2日間は、ペラルーシ市内を精力的に動いた。ミンスク市臨床悪性腫瘍（しゅよう）病院や再教育センター、ペラルーシ赤十字など移動検診で連携する各機関を訪問。日本から持ち込んだ医療器材や医薬品を手渡し、打ち合わせをする。どこにいても寛大なもてなし。武市、星両先生には新たな研究活動のオフアームもあった。チェル九州の移

動検診活動が現地に根差し、スムーズに進んでいることがよくわかった。

在ペラルーシ日本大使館で大使と会う機会があった。きさくな人柄の大使は「日本人は、ペラルーシを、『チェルノブイリ』と『独裁的な大統領』という印象しかない。こんなに静かできいな国なのに。このギャップをなんとかしたいですね」と率直に語る。ペラルーシではルカシエンコ大統領の「社会主義的」政治が続いている。そういえば、出会った何人かにその話をふると、一応に「政治は語らない」といわれた。でもそのうちの一人が「（政治の）善し悪しは歴史がきめるさ」とひと言。内陸国にあり、領土をめぐる戦いに常にさらされてきた民族だからいえる大局的寛容さなのだろうか。

2日目の夜は、ホテルで「のぞみ21」のナターシャさん一家、「コンフィデンス」のイリーナさんと合う。孫のナターリヤちゃんの愛くるしいそぶりを見つめながら、ナターシャさんが工房の苦しい実情を話す。「このままではやっていけない」と苦悩の表情。イリーナさんも「チェル九州の支援があるから活動が続けられてる」という。支援を必要とする人のために地道な活動をしている人が、社会の厳しさに真っ先に直面するという現実。なにかできることはないのかと苦しくなる。2人が口にした「チェルノブイリは終わってない」の言葉からは、二十年前のあの日から、苦しみはなくなっていないという思いが響いた。

滞在3、4日目は国際会議。最初はミンスク

で、次の日はゴメリに移動。メンバーそれぞれの研究発表があった。寺嶋さんと山口さんが発表するNPO団体の円卓会議に同席する。会議にはヨーロッパの団体が多く出席し、ほとんどが転地療養活動の報告。その中で、チェルノブイリの移動検診の実践報告は注目された。会議終了後は何人も人が駆け寄り、質問せめ。2人とも「現地の人が望む、意味のある活動を私たちはしてるんだと実感できた」とうれしそうに語った。

初めての旅は足早に終わった。余談をいくつか話すと。食事は本当においしかった。生野菜のサラダ、細切りの肉と野菜のスープ「ソリヤンカ」、シシカバブみたいな串焼き「シヤシリク」、さまざまな豚肉料理など。ウオツカもビールもとてもうまい。体重が増えなかったのが不思議なくらいだ。町中、美人揃いなのも驚いた(イケメンも多い!)。女性のもっともポピュラーなスポーツが新体操という(ちなみに男性はサッカーとホッケー)のも大いに納得だ。

帰国後、ベラルーシの話をする、「荒廃した国を想像してた」「なにもないのかと思った」という人がかなりいた。美しい国だったというとみな驚く。風景写真を見て私がベラルーシを身近に感じたように、支援の輪を広げるには、暮らしか文化を通じてどんな国かということを知ってもらわねば、とつくづく感じた。

今回の旅では、チェルノブイリの移動検診を見たわけでもなく、病気に苦しむ人の声をじかに聞いてもない。でもベラルーシの「かけら」に触れたことは確か。「また行きたい」。心からそう思っている。

お近くでチェルノブイリ報告会を開いてみませんか? 出前勉強会・報告会のご依頼をお待ちしています!!

今年にはチェルノブイリ事故から20年目となる節目の年。

皆さまにお預かりしたお金を、どのようにして被災地支援として活かさせていただいているかのご報告や、チェルノブイリ20年目の現地の様子、支援運動がどのような活動を行っているか等について、支援運動スタッフがあなたの町でお話します!

…例えば…

- ◆寄付を寄せて下さっているグループメンバーの集まり
(被災地の現在の様子、寄付がどのように届けられているかなど)
- ◆お知り合いの集まり(チェルノブイリの現在の様子など)
- ◆グループで主催する勉強会(国際協力講座、環境問題など)
- ◆保護者会、父兄会、PTAなど(被災地の子どもと母親の問題、環境問題、研修会のテーマとしてなど)
- ◆大学の講義(国際協力論、NGO・NPO論、社会学など)
- ◆中学や高校の授業(総合学習、国際理解、平和学習、文化祭など) など

写真パネルやパワーポイント、ベラルーシ民芸品などを使った報告会は、具体的で分かりやすいと大変好評です。テーマや時間、日程、内容などは相談の上で調整し、また九州エリアであれば、原則として費用は不要です。

まずは事務局までお気軽にご相談下さい♪

*** 実際に報告会を開いた会員さんの感想 ***

長崎県職員組合女性部では、チェルノブイリ原発事故の被曝者支援のため、毎月9の日に1円玉募金をしています。長年取り組んでいましたが、私たちの募金がどのように使われ、現地の状況はどのようになっているのか知りたいと思い、支援運動から講師を派遣してもらいました。写真やグラフを使った分かりやすい内容で、募金が本当に現地の被災者への支援、特に現地での医療支援に貢献しているのがよく分かりました。

現地では、今も甲状腺がんをはじめ、その他のがんを発病したり、甲状腺がんの摘出手術を受けた人も一生ホルモン剤を飲み続けなければならないなど、健康に不安を感じながら生活しています。

被災から20年が過ぎても、現地の情報を聞く限り、まだまだ支援の必要性を感じます。自分達の募金がどのように使われ、現地の状況はどうなっているのか知るとは、募金を続けるうえでも大切なことと思います。

(阿南愛子/長崎県職員連合労働組合女性部部长)

検診に協力している日本の医師たちの存在は非常に大きいです

ベラルーシの人々からの声 甲状腺ガン検診を受けた人々へのインタビュー

ブレスト市での5度目となる検診を受けに来た人々は、アルツール医師らによる国際赤十字の移動検診チームがピンスク（ミンスクとブレストの中間地点）で行ったエコー検査により、もっと詳しい検査が必要であるとされ、この検診を受けるようにすすめられた人々（工場の労働者たちなど）である。患者は今回のピンスクでの検診が初検診だった人、以前から甲状腺の異常を指摘されていた人など様々であった。この検診プロジェクトが日本とベラルーシ双方の医療専門家による合同検診だということを知っている人は少なかった。しかしエコー検査を受けたことがあっても、ガンの疑いのある細胞を取り出し、診断する「吸引穿刺による細胞診」を受けたことのある人はおらず、患者の多くが今回の検診を心待ちにしていた様子だった。今回の検診を受けるために車で2時間以上かけて診療所まで来た人もいた。この検診プロジェクトについて説明すると、「自分が病気がどうかかわからないままではいるのはとても不安だから、検診後すぐに結果がわかるのは大変うれしい。ぜひまた検診に来てほしい。」と口々に言われた。

患者さんへのインタビュー その1



甲状腺の検診の現場にて

マリア・ドボロフスカヤさん（55歳・女性）

◆出身はどこですか？

ブレスト州にあるマリチ村で生まれました。

◆家族構成を教えてください。

主人と息子が2人います。

◆甲状腺に異常があるとわかったのは

いつごろのことですか？

1995年にミンスクにあるサナトリウム（保養地）へ保養に行ったときに、首のあたりに何か異常を感じました。

そこで医師に相談したところ、一度、甲状腺を診てもらったほうが良いと言われました。そして検査の結果、甲状腺に異常が見つかりました。

◆甲状腺に異常が見つかったあと、何か治療をされましたか？
治療薬を飲むようになりました。

◆現在まで、その治療薬を

服用されているのですか？

はい。ただこの薬は冬用のものなので、夏は飲んでいません。でも薬の服用だけでは良くなりませんでした。他の治療は何も受けませんでした。誰も相談にのってもらえる人がいなかったのです。

◆なぜ今回のピンスクの検診を

受けられたのですか？

1997年、ミンスクにある医療センターに入院していたときに、輸血のために血液のサンプルをとってもらいました。そのとき医者に手術はまだ必要でないが、甲状腺の腫瘍が肥大化しているので定期的な検査をしなければならぬと言われました。そのときから毎年2回ずつ定期的に検診を受けるようになりました。そしてピンスクでの検診を受け、もっと詳しい検査をした方がよいので、今回のチェルノブイリ支援運動・九州の検診に参加するように言われました。

◆自由にメッセージをお願いします。

この検診プロジェクトはとても重要なものだと思います。私たち患者はみんな、病気を克服したいと思っています。だからこの検診に協力している日本の医師たちの存在は非常に大きいです。彼らは検診を行い、その結果を出し、そこから適切な治療方法を導き出してくれます。

患者さんへのインタビュー その2

アンナ・シジュクさん（48歳・女性）

◆ご出身はどこですか？

私はホベニという町で生まれました。現在はホベニ地区のベルザという小さな村で働いています。

◆どんなお仕事をされているのですか？

肉の缶詰をつくる工場に働いています。もう20年くらいになります。

◆今回の検診に参加された経緯を教えてください。

去年、アルツール先生たちの検診チームが私の働いている工場にはじめて検診に来てくださいました。そのとき検査を受け、甲状腺に異常があると診断されました。それまでは自分が病気かもしれないとは全く知りませんでした。

◆そしてそのときに、今回の検診に参加するよう誘われたのですか？

はい、そうです。もし去年、アルツール先生たちの検診に参加しなかったら、私は自分の病気について知ることはなかったでしょう。

だから国際赤十字の検診チームのみなさんや、今回の検診に協力している日本の医師たちに心から感謝の意を表したいです。でも私と同じように、自分が病気であるとは知らない人はたくさんいると思います。自分の住んでいる町から遠く離れた病院まで検診を受けに行く人はあまりいません。だから自分たちの

住んでいる地域に医師が検診に来てくれると、自分の健康状態を知ることができるので、とてもありがたいです。

◆1986年にチェルノブイリ事故が起きたとき、あなたはどこにいらっしやっただか教えてください？

当時、私は妊娠をしていました。事故が起きたときは、畑で仕事をしていました。そのときはたれも原発で爆発事故があったことを知りませんでした。今私の息子は19歳です。彼にもぜひ検診を受けてほしいと思っています。私の働いている工場が検診があったとき、息子にも検診してもらいたかったのですが、工場の上層部の人たちは子どもをつれてきてはいけなと言いました。私は彼の健康を非常に心配しています。原発事故当時、彼は私と一緒に（お腹の中で）外にいました。だから彼も事故の影響を受けていないか、とても気にかかります。

私たちが、原発事故についての一般的な情報を知ることになったのは、事故が起きてから3ヶ月くらい後のことです。私の兄も事故当時、現在、汚染地域に指定されている場所にいました。兄はまだ甲状腺の検診を受けたことがありません。彼は体の調子がよくないので、自力で遠くはなれた病院まで行くことができないのです。だからぜひアルツール先生たちの検診チームに、彼の働いている工場でも検診をしてほしいと思っています。そしてもし異常が見つかれば、私と同じように、日本の医師によるもっと詳しい検診を受けてほしいです。

事故からもうすぐ20年 忘れちゃならないチェルノブイリ基礎知識

【原発が抱える問題－労働者の被曝】

通常規模の原発を一年間運転すると、炉心には広島原子爆弾が放出した死の灰（放射性物質）の千倍ほどの放射能が溜まるという。原発には放射能というこの目に見えない問題がついてまわる。そしてもしチェルノブイリのような事故が起きれば、当然のことながら大問題となる。しかし、爆発事故以外にも、原発には重要な問題がある。

その一つが原発労働者の日常的な被曝の問題である。これは原発の定期点検といった作業についてだけいえることではない。燃料となるウランの採鉱から放射性廃棄物の処理にいたるまで、すべての過程で放射能の被曝という危険がともなう。なかでも特にひどい被曝を強いられるのは、作業現場の放射能を雑巾などで拭き取る除染作業者といわれる人々である。そしてこういった作業に従事している人々の多くは、農村や漁村からの出稼ぎ労働者や、都市スラムの失業者などであるという。原発労働者の被曝の影響はすでに顕在化してきているといわれる。しかし被曝して、その影響がガンや白血病といった晩発性障害の形で後々あらわれたとしても、その病気の発症まで何年もかかっている。そのためチェルノブイリでもそうであるように、その因果関係を証明するのが難しい。よって被曝が原因で労働者が亡くなったとしても、会社側がその責任を認めようとしにくいケースも出てきているという。（文/三島さとこ）

国際会議参加報告

ベラルーシの人、土、風とともに

報告・山口英文（チェルノブイリ支援運動・九州運営委員、通訳）

この拙文を5月25日に惜しくも若くして死去された、私のロシア語の恩師の一人で、素晴らしい作品を次々と書いていましたエッセイスト・ロシア語通訳の米原万理先生に捧げます。そして今も苦しむベラルーシの事故被害者とその世を去った人々にも。またウクライナ・ロシアの被害者の人々にも。そして支援運動を支持してくださる全ての皆様へ。



山口 英文（やまぐち ひでふみ）

1962年生まれ。東京ロシア語学院でロシア語を学ぶ。その後、オホーツク海でロシア語を磨き、チェルノブイリ支援運動・九州では運営委員として、またロシア語通訳として活躍。現在は嶋田内科に事務長として勤務。料理に剣道、水泳（マスタース、オープンウォーター）、オフロードバイクと多彩な趣味を持ち、仕事にチェルノブイリに、日々めまぐるしく活動する頼れる44歳。

「国際会議があるんですが。山口さん行けませんかね？」事故20周年会議についての議題が出た時、運営委員会でテキパキと議長を務めてくれる津島さんが言ってくれた。矢野さんも「山口さんが行ければ一番いいんですが」といつものほんわかした調子で付け加えてくれる。

そう言えば本当にしばらくベラルーシに行けていなかった。プロの医療通訳の山田英雄さんと違って、私はチェルノブイリ支援運動の仕事以外ではロシア語を使う機会がない。ましてロシア・ベラルーシに行く機会は本業との兼ね合いでほとんどない。小さな零細病院の事務長という立場は「皆さんよろしくやってくださいね」と一言残して旅立つという訳にはいかない。今年も4月に保険診療は下げられて厳しい。院長は優しいが、優しさに甘えて許可を取っても現実は皆にしわ寄せが行く。それでも職場の許可も得られ、私は久しぶりにあの美しいベラルーシに行く事が出来るようになった。

今まで私は、チェルノブイリ支援のため現地を訪れた人でベラルーシを嫌いだと思った人を見たことがない。初めての和田さんもまずはロシア・ベラルーシの食べ物意外と美味しいとの感想である。野菜が豊富で力強く香りがいい。たっぷりの野菜と美味しい黒パン。ロシアも日本も野菜を豊富に食べるようで親近感が沸く。

ミンスクの空港では意外にも怖くてう

るさい税関が誰もいなかったの、寺嶋さんと小躍りしながら支援物資を持ち込んだ。入国審査の国境警備隊も親切で笑顔も見せる。雰囲気随分違って来たなどの印象だ。

空港では笑顔一杯の赤十字の人々が待っている。「ようこそベラルーシへ。どうですか旅は？」と話しかけてくれた。ベラルーシの道は相変わらず美しい草原と農家、そして広大な針葉樹林が整然と広がっている。

以前に来たときよりも落ち着いている。モスクワが騒がしくエネルギーシユなのに対して、ベラルーシは端正で調和が取れている。赤十字の人々も前にも増して優しい。誰だ？大統領が独裁して国民が苦しんでいるなんて言っているのは。でも、英雄都市ミンスクと書いたミンスク郊外のモニュメントや第二次大戦の慰霊碑や戦勝記念塔に、ベラルーシの歴史がけっして今の様な穏かな時代だけを経てきていないことが分る。

その後、のぞみ21のナターシャさんたちに会う。ステパンさんと固く握手して再会を喜ぶ。元気そうだ。この日の為に民芸品をたっぷり持ってきてくれた。箸とマトリョーシカ型箸置きに感心した。

ナターシャさんの孫、娘ニーナの忘れ形見であるナターリヤちゃんも屈託無くマトリョーシカで遊び始める。「これがお父さん。これがお母さん。子ども。そしてこれは隣のおじいさん。」最近の日本



ナターシャさんたちとの会話を楽しむ山口さん

では子どもがお人形さん遊びよりはゲームやカードが主力だ。それゆえにナターシャちゃんの即興物語が新鮮で面白い。ナターシャさんに運営委員の小山さんから託った小学生達のメッセージや絵が渡される。「ナターリヤ！これみんな日本の小学校からよ！」と目を潤ませて、日本を懐かしんでいる。もう一度、この人たちが日本に来ていろんな話をする機会ができないのかと思う。ナターシャさんと寺嶋さんと一緒に民芸品を分けていく作業だけで時間がなくなってしまう。もっともっと話したい。いろんな事を聞きたいと思うが……。最後にナターシャさんが残念そうに「どこまで工房が続くか分からない。一息ついたけど」と小声で言う。ベラルーシは今もかなりのインフレで、給与に比べれば生活はかなり大変で、食べるのに精一杯とも聞く。

私は何も言えなかった。ステパンさんと固く抱き合って別れを惜しむ。彼らの苦労と困難を思うと、日本で我が侘な生活を送っている自分が恥ずかしい。

翌日、いよいよ国際会議に臨む。会議は厳粛に始まった。ベラルーシの国歌が流れる。きれいな旋律でベラルーシの美しい自然を歌っている。大統領の演説を楽しみにしていたが代読に終わった。

会議では正教会主教とカトリック枢機卿も話をする。主教は犠牲者は永遠の命を与えられ、今も生きる人々も厳しい試練を与えられたが神のご加護でベラルーシとベラルーシの人々は必ず甦るとの事。枢機卿は、もっと現実的にカトリック教会が医療・支援にいかにか努力したかとそして精神的な支えを果さなくてはと話してくれる。これだけカトリック教会が活躍しているなら日本のカトリック教会を通じていろいろと連携が取れるといいなと思う。ベラルーシはポーランドと交流が深いのでロシアやウクライナよりもカトリック教徒も多い。実際にミンスクにはカトリック教会らしい教会も多い。二人の話聞きながら完全にこの国と人々は公私共にソ連時代の無神論とはお別れし、新しく宗教が国の精神的中心を果し始めたのだなと実感した。

第1日目の全体会議が終わると私達は移動検診車「ゆきだるま2号」に乗ってゴメリに向かう。途中、レベジナ川、ドニエプル川とヨーロッパを代表す

る大河を渡る。ドニエプル川は今も運河としての役割を果し相当な規模の港もある。中世までは物流と人々の行き来を支えた大動脈でもある。悠々と流れる川とこの国の歴史が重なる。

途中、車を止めてもらい、素晴らしいベラルーシの満天の星空を仰ぎしばしば皆が感激していたら、豪快な音を発てていつまでも続く長大な貨物列車がしばらく通過する。この国も一生懸命やっていると。必ず幸せになる日が来るに違いないと思ってみたりする。

夕食を取り、ベラルーシの特産とも言える豚肉のパーベキユー焼き（美味しい！）を食べながら、星先生初め皆からの質問が運転手のタデウシユさんに集まる。自然に彼がこの席を仕切ったような雰囲気になり、ちょっと照れながらも食事を楽しんでいる。「日本人とは歴史で対立したことがない。確かに一番親しいのはドイツだろう。でもドイツとの歴史は辛い出来事がある。良好であつてもそれがどうしても思い出される。日本とだったらそれがいい。日本はベラルーシ人にとって一番好きな国の一つじゃないかな。」とも。

ゴメリに着く。ゴメリのホテルは労働者向けの安宿らしいがレトロで映画みたいな気持ちになる。ホテルの受付もゴメリっ子という雰囲気的女性が適当にお喋りしながら「どう？ゴメリは気に入った。また来なさいよ。」「チェルノブイリで来

たんだろうけど、それ以外でも来て欲しいわよ。こんな良いところないよ。でも日本はもつといいんでしょうね。」と言ってくる。

ゴメリの夜は懐かしいほんやりした白熱街灯の光がホテルの前の広場と通りを照らしていた。

ゴメリでの会議は会場まで特別バスに乗っていく。会議は昨日よりももう少し突っ込んだ発表が続く。武市先生には現地のボランティア通訳（英・露）が来てくれた。素晴らしい教養と礼儀の持ち主で映画スターにしたいほどのハンサムだったとか。ミンスクでもミンスク大学の日本語学科の生徒達と出会うが教養と礼儀正しさが素晴らしい。発音もきれいだ。優秀な人がいるし、親日家も多いのだが経済交流が少なく残念ながらその教育を生かせないですとチェレンチェフ一等書記官も残念がっていたが本当など改めて思う。

NPO会議ではドイツ・イタリア・スウェーデン等の代表も来ている。彼等はほとんどが里親方式での子供の転地療養に力を入れている。私達の発表については、皆真剣に聞き入っていた。パワーポイントで映し出される支援運動の日常やナターシャさんたち。そして検診の風景。この検診に広島の医師が関わっているという事実が、彼らを惹きつけていたのは明らかだった。ヨーロッパの代表達も小声で何かお互いに囁きあっている。

データ、成果はどれを見ても諸外国に劣らないし、少ないお金を賢く使おうという支援運動の想いは通じたようだった。

会議の後、私のところにリクビダートルの一人が来た。「今、プレストに住んでいる。私の友人、親戚が次々と死んだ。私もいつも喉の調子が悪い。是非、日本の医師団の検診を受けたい。」すぐにアルツール医師の病院の住所を書いて渡すととても喜んだ。リクビダートルでプレストにいたら当然、このような情報を得ていると思っていたがそうでもないらしい。検診だけでもほんの一滴でしかない。

しかし、この検診活動を続けることは世界で唯一の被災被爆国の責任だ。そうでないと広島・長崎の無数の犠牲者が浮かばれないと思う。ベラルーシの人々が一番厳粛に身を正して聞いてくれるのは「ヒロシマ・ナガサキ」の話である。

その為にベラルーシに来ていと言う時、文化・習慣・歴史・主義・民族・言葉を超えて思いが一緒になる。私も含めてまだまだ彼らとお付き合いは浅い。彼らが本音で外国人と話が出来ようになったのも約10年の歴史しかない。これからのだ。チェルノブイリ事故が起きてもう20年と言われるが、放射能を浴びた人が成人した時間ではない。つまり彼らの寿命だけでも付き合い合わなくては何も分らない。アルツール医師はこれからの100年を予見している。他の支援活動と違って我々は最初の一里塚を通ったに過ぎないのである。

ミンスク出発の朝、空港の外でベラルーシの大地の匂いを胸いっぱい何度も吸い込んだ。柔らかな干草のような優しい香り。もう日本ではほとんど出会うことの無い香りが朝霧と一緒に見渡す限りの針葉樹の森と草原へ広がっていた。

チェルノブイリ支援運動・九州事務局日誌

駐日ベラルーシ大使の訪問

文／吉本美貴（チェルノブイリ支援運動・九州事務局長）



駐日大使との記念撮影

春を迎えたとはいえまだまだ冷たい風の吹く3月末のある日、駐日ベラルーシ臨時代理大使バチャノフスキー・レオニド閣下が一等書記官で通訳のチェレンチェフ・セルゲイ氏とともに、ここチェルノブイリ支援運動・九州事務局へいらっしゃいました。訪問の1番の目的は、これまでのベラルーシの被災者に対する支援活動へのお礼のため。わざわざ東京から大使自らが向いてくださるということは、決して規模は大きくないけれど、これまで会員の皆さまに支えられて行ってきた支援運動・九州の活動がベラルーシ外務省にも認められた証でしょう。

「事故20年という節目に支援運動・九州とチェルノブイリ支援実績のある助成団体へのお礼、そして福岡の代表的な機関への挨拶をしたい」という大使の要望にこたえるべく、2日間でチェルノブイリ支援運動・九州事務局のほか、財団法人福岡国際交流協会、福岡県、福岡市、福岡商工会議所、株

式会社福岡ソフトリサーチパーク、NGO福岡ネットワーク、JICA九州などへご案内しました。

大使はあちこちで「福岡の皆さんの息の長い支援に感謝しています」とお礼の気持ちを述べられ、事故については「20年を迎えたが、ベラルーシの土地と人々にもたらされた被害はまだこれからも続く」と話されました。一方、「チェルノブイリ」を通してのつながりだけでなく、福岡とベラルーシの文化的な友好関係、経済的な協力関係も希望されており、その可能性を再確認して帰京されました。ベラルーシは汚染前まではヨーロッパ圏では農業で有名だった国ですが、近年ではICチップやガラスファイバーなどの機械・電子産業もさかんです。大使からは、支援運動・九州のネットワークの強さと大きさを活かしての福岡での「ベラルーシ友好協会」設立の提案もあり、支援運動・九州でも前向きに検討していきたいと思っています。

日本駐在のベラルーシの外交官は大使とセルゲイ氏のお二人だけとあって、滞在中もしばしば携帯電話が鳴りお忙しい様子でしたが、移動中や食事の席ではベラルーシ風の冗談も交えながら場を和ませてくださいました。「よか」とか「すかん」といった博多弁もお気に召した様子で「他にはどんな言葉がありますか？」と即席の博多弁講座も求められ、私が今までに会ったことのあるベラルーシ人の例にもれず、大使や書記官という肩書きを感じさせないほど親しみやすいお二人でした。

事故以来、時間は止まったままです

福祉工房「のぞみ21」ナターシャさん家族の今



ナターシャさんと孫のナターリヤ

ベラルーシ共和国ゴメリ州で、被災者や障がいを持つ若者たちが働く福祉工房「のぞみ21」を経営するナターシャ、ステパン夫妻。甲状腺ガンで息子のオレグさんを20歳という若さで失い、昨年、娘のインナさん（享年34歳）もこの世を去りました。今は、インナさんが遺した孫娘のナターリヤちゃんを引きとり、3人で生活をしています。

家族3人での生活は幸せであるけれども、ナターシャ、ステパン夫妻は身体が弱く病気がちな孫娘のナターリヤちゃんの健康を心配しています。事故後、汚染州に指定されたゴメリ州。最愛の子ども二人ともを亡くしたこの土地でナターリヤと暮らし続けることへの不安から、夫妻はゴメリにあった自宅を売ってミンスクに移り住みました。とは言え、オレグとの思い出がつまっています。スタッフたちの生きがいのある場ともなっている工房を手離

すわけにもいきません。そうしたいきさつから、今はナターシャさんとナターリヤちゃんがミンスクで暮らし、ステパンさんがゴメリに残って、親戚の家に居候しながら工房に通う毎日です。

4月のベラルーシ訪問中、メンバーが滞在していたミンスクのホテルへ、ナターシャ家族がたくさん民芸品を持って会いに来てくれました。会員の皆さんから寄せられたカンパとメッセージを届け、民芸品を購入しました。「その後、工房の経営はどうですか。日本の会員さんたちもみんな心配しています。」と訊ねると、「経済情勢の大きな変化で、工芸品の原材料の仕入れが難しくなるなど、今は開店休業状態が続いています。被災者のための工房を閉めなければならなくなるかもしれません。私たちにとっては、事故以来、時間は止まったままです。」とナターシャさん。期待とは裏腹の、つらい答えが返ってきました。

チエルノブイリ支援運動・九州は、ナターシャさんの口癖でもあり、工房の名前でもある希望を持って、これからもこの家族に寄り添っていききたいと思っています。

■引き続き、工房運営のための「のぞみ21カンパ」を募っています。郵便振込用紙の「のぞみ21カンパ」欄にチェックをしてお振込みください。※コンビニ振込用紙をご利用の方は、お手数ですが「カンパ額」と「のぞみ21カンパ」である旨を事務局まで一報ください。

工房のぞみ21の新作が届きました!!



工房のぞみ21の新作の数々

民芸品、入荷しました！

商品の詳細は、同封の別紙カタログ、またはホームページ(→<http://www.cher9.to/mingei/mingei.html>)をご覧ください。ご希望の方にはカラーカタログもお送りしています。その他、ご注文、お問い合わせは、すべて事務局までお気軽にどうぞ。

民芸品の新たな仕入れ先を探しています。

現在、「のぞみ21」の商品売上の大半はチエルノブイリ支援運動・九州が占めています。私たちの他にも「のぞみ21」の直接の仕入れ先となってくれる団体、個人の方がいらつしゃいましたら、事務局までお知らせください。

たくさんの募金をありがとうございました。

(敬称略・順不同)

松尾美佐子 林田洋子 相川美智子 木下るみ 青木万寿美 「ミニカーと雑貨ガレージエイト」芳木恵子 飯屋園今日花・昂介・椛 蝶名林えい子 伊藤英彦 桜木秩子 鳥取治代 めぐみ保育園職員一同 宮本カズエ 田中潮里 木村紀子 西首延子 野村伸子 田川星子 黒岩英子 綱脇牧子 原口敏子 中島美代子 Steven & Makie Sabotta 榎本みつ枝 村田聡子 林田英明 室屋芳乃 深堀ミチ子 河上しげみ 白水明代 佐藤久美 大田澄子 大町友穂 宮元美帆 橋田順子 杉本久三子 中嶋寛 堀江誠子 岸川美好 堤安佐枝 島田立子 サトウ矯正歯科クリニック 櫻井美喜子 東道成 宮田香子 立木敏枝 荳嶋教代 星野裕子 国行典子 岩口香織 大島朋子 山本康江 西井田智枝 高山幸子 チェルノブイリ子ども基金 志村信子 山中陽子 梶村静江 富永勤子 芦原純子 富田明美 前田・中西・沖泉の鯉 田代純子 栗山美香 柴田広実 井上裕子 飯岡知子 大場満 中山たまき 日高太 長谷祐子 中島幸代 永野沙智子 福山知恵子 内田怜子 内田ケサエ 山下晶子 山下聡子 財津悠子 賀来紀子 上野三佳子 波多江淑子 賀来明美 今村松江 甘蔗珠恵子 梅美佐子 石丸美幸 庄司美千子 松永和子 岡本順子 筒井毅浩 杉下啓憲 小楠小学校児童会 田中えみ子 守山美佐子 成迫秀美 岩川由紀 福永弘恵 福本勅子 壬生伸子 鳥原良子 渡辺絹子 松山京子 瀬尾雅子 原岡ひとみ 皆越しをり 水落靖子 SACエアロビクスクラブ 皆木道子 今井登美子 片岡直樹 久保カヨ子 栗田光子 太田昌子 柳元秀昭 立石肇 上野由美 本岡眞利子 友景忍 野田邦子 豊田直也 小塚秀吾 岩森久美 榊田千絵 太田千賀子 井上輝美 松尾満子 武田孝子 岩川靖子 須納瀬みちよ 林裕子 有川恭子 金森則子 山下由紀子 堀恭彰 重藤馨子 北野薄 浪江理映 林隆子 山崎末吉 溝口真澄 保坂尚子 渡辺美佐子 坂本正典 山口幸子 井上恵美子 久田文子 林裕之 坪山美由紀 井手公平 立木弘子 河口友子 三木紀代子 江田鈴枝 田村栄子 真鍋恵子 中村栄子 川口笑美子 中尾京子 花田祝子 瓜生玲

子 栗本知恵 立石千絵 安岡清隆 大山静香 河上由美子 坂本敏子 里見照子 堀花美代子 高丘由加利 馬田敏幸 金山涼子 川原美穂 竹内サキ子 今泉一彦 松本みね子 中川洋子 城戸文子 荒木ミネ 島田まゆみ 佐々木孟 田畑美由紀 富永三恵 浅井由美子 渡邊裕美 藤ノ原良子 佐竹早苗 馬場美保子 生駒早知子 狩野浪子 原田和代 今村陽子 井上洋子 樋口哲也 西征子 唐牛健三 川野久美 野村伸子 西村以久子 井上陽子 本田裕子 前園芳子 山本町子 久保山千俊 笠ちず子 稲吉三枝子 石田矩子 真澄三奈子 野上文香 森澤恵子 山田里美 大石和子 伴信子 谷口美江 三小田泰恵 山下明美 本田スミ子 深津高子 竹田恵子 山口郁代 渡邊廣子 古賀えみ子 木村哲夫 進藤輝幸 上條千栄 松尾博文 坪川裕子 田村朝子 秋山悦子 鍛崎真美子 山中良子 土持秀男・由利子 平原久子 天賀京子 田中幸村 渡辺文江 徳永和子 松田容子 田中ゆかり 高村久美 平林梨花 倉掛彩子 田中香 早川幾枝 石峯中学校生徒会 古賀千種 小山信子 永富けし 西尾禮子 後藤宇企子 川崎君子 美土路瑞江 下城恵子 渡辺佐代美 草ヶ江幼稚園園児一同 チェルノブイリ友の会 山口英文 水車むら農園 グリーンコープ生活協同組合おおい 澤田和子 前田晶子 松本弘子 堀之内真吾 柳楽翼 多田宏美 測レディスクリニック 筑豊互助会 菊地順子 亀井廣子 三宅哲子 NPO法人じゃがいものおうち 岡田薫 桑山道子 宮西いづみ

募金内訳

(2006年1月1日〜5月31日までに募金をして下さった方、ならびに、「のぞみ21」民芸品、チェルノブイリ支援コーヒー・紅茶の購入を通じて活動を支援して下さった方です。通信にお名前を紹介することを許可いただいた方のみ掲載しています。)

3000円コース	800、1000円(267件)
5000円コース	405、000円(79件)
10000円コース	550、000円(45件)
「のぞみ21」カンパ	133、530円(36件)
その他カンパ	1291、683円(242件)
(分割払いの方もいるので数字は割り切れません。)	
合計	3180、313円

募金者からのメッセージ 一部抜粋

●私にできることは、ほんのわずかな形でしかできませんが：行動したくて!!チェルノブイリの支援運動がスムーズに進みますように。●精一杯がんばってください。●お役に立てますように。●できるところで、応援させていただきます。●子どもたちのために支援運動を続けてください。●1人でも多くの子どもに希望の年がきますように。●玄関のゲタ箱にはマトリョーシカちゃん。大きな目でいつもお出迎えしてくれます。●未来への灯火となりますように。●今年で20年ですね。がんばってください。●若い人たちの様々な取り組みに頼もしさを感じています。●1人でも多くの方が幸せな生活を送れますよう。●(のぞみ21の)ナターシャさんの手紙はいつも生きる希望、勇気を感じます。ありがとうございます。●少しでもお役に立ちたい、そんな気持ちです。●事故から20年、必要とされている支援ならば、続けていなくては。●チェルノブイリのことは他人事とは思えません。●自分の生きている時間と、重ね合わせ想像力をありがとうございます。●今年もチェルノブイリ20年で、あつという間のことには驚いています。●出来る限り長く支援したいと思っています。●早いもので20年。人類が身をもって示した教訓を風化させずに次世代に伝えていかねばとあらためて思います。●20年目、この事件を決して記憶の底に沈めないように。●(チェルノブイリ支援)紅茶を飲むだけで少しはお役に立てる、というのは気が楽です。●本当の平和へ!!●20年の報道も様々ですが、ベラルーシは少なく、支援運動・九州の活動のすばらしさを感じます。●被災者の皆さまのために役立ててください。●継続は力なり、いつも応援しています。●どうか日本が、世界が原発に頼らない国になりますように!●これからも事実を誰にでもわかるよう伝え続けてください。●早く安全な場所となりますように!●「チェルノブイリの群像」を読ませて頂き、改めて地道な活動をなさら続けていらっしやることに頭が下がりました。これからもよろしくお願い致します。